

『総力戦体制からグローバリゼーションへ』

—— reflexivity を軸に ——

升 信夫

はじめに

ウルリッヒ・ベックは現代社会を捉える言葉として「階級社会」に替え、「リスク社会」という観念を提示し、その社会の特徴の一つとして、これまで国家の諸政治制度に独占されてきた政治的な決定の重要部分が、科学や企業に移行するという点を指摘している。かつてJ・N・フィッギスは、中世の政治観念から近代の政治観念への転換を語るに際して、「教会は一つの国家であったのではなく、唯一の国家であった」と論じた。¹⁾ 中世から近代への展開が、教会から主権国家に政治的決定の場が転換することにより特徴づけられるとすれば、近代からリスク社会、或いはグローバル社会への展開は、主権国家の政治過程に独占された政治的決定が、再び流出拡大することにより特徴づけられることになる。仮にそうであれば、我々は劇的な変化の時代のただ中に置かれていることになるが、従来の認識の枠組

みに囚われるならば、そうした変化を掴むことは難しい。本学で先般開催された「法は国家の独占物か」をテーマとするシンポジウムは、政治的領域の変容について、立法という局面に焦点をあて検討したものであったが、その中で、チュービンゲン大学教授(本学終身教授) K・W・ネルによる報告は、中世の教会における法発展の担い手に焦点をあて、世俗的國家の領域外で法形成がなされた過程を含蓄深く描くものであった。法が國家の独占物でなかった時代がかつて存在したという認識は、中世では世俗國家は國家ではなかったという、先のフィッギスの指摘と重なり、新たな状況を想像力豊かに把握するための手がかりとなるだろう。³⁾

本稿で取りあげる、二〇〇三年初頭に上梓された論文集『総力戦体制からグローバルゼーションへ』(平凡社)は、第二次大戦の戦前、戦後を、従来の全体主義体制から民主主義体制への転換という「断絶」を特徴とする構図ではなく、総力戦体制の発展継承という「連続性」を特徴とする構図で捉え、更にその延長上にグローバル化を位置づけようとする試みである。そこには、冷戦構造は両陣営いずれの側でも、國家權力の一層の浸透強化をもたらしたのであって、冷戦崩壊後のグローバル化は、そうした權力の浸透強化とどのような関係性を有しているのかを軸に確認されねばならないという主張が含まれている。編者である山之内は、この書に先立ち、一九九五年には『総力戦と現代化』の編集に携わり、総力戦体制により階級社会からシステム社会への移行が果たされたという視座を提示し、引き続き一九九九年の『日本の社会科学とウェーバー体験』では次のように論じている。「グローバル化は、(中略)一見すると、総動員体制の解除と、それによる自由主義路線への復帰を意味しているかに受け取られる。総力戦時代に達成されたシステム化はもはや逆戻り不可能の社会的統合を実現している。」³⁾

本書の問題提起に接すると、トックヴィルがフランス革命に対して行った考察が想起させられる。革命による断絶が強調される状況にあつてトックヴィルは、『旧体制と革命』を書きあらわし、國家權力の増大という側面では革命前

後で連続性があるということを喝破した。但し、そうした連続性があるとしても、フランス革命が封建的な統治体制を大きく変更したものであり、それにより多くの市民が政治的領域に包摂されるようになったという側面も依然として否定したい。それと同様に、戦前戦後では統合化過程という側面から見ると連続性があるとしても、戦前戦後、そして冷戦構造崩壊前後で、別の側面での断絶があることも否定しすることはできない。その時、次のような疑問が湧く。一つの事象に対して、何に依拠して異なった見え方が成り立つのだろうか。また様々な像が成立する場合、それらを統合する価値意識は何を根拠として成り立つのだろうか。

フランス革命、グローバル化、どんな言葉でもよいのだが、日常の言葉のやりとりでは、その意味を十分に了解している積もりで会話は成立している。つまり、グローバル化が進行して企業活動は云々、などと語るとき、グローバル化という言葉の意味を理解している積もりで会話が行われている。しかし、その意味を問われると、俄に対象は多様な様相を呈しはじめ、わかっていると思えたことが不明瞭になってゆく。もちろん、そうした言葉が孕む不思議さは、古くから意識されていた。ウイトゲンシュタインも『哲学探究』の中で引用しているように、アウグスティヌスは『告白』で次のように述べている。「私達は時間について語るときそれを理解しているのであり、また他人が時間について語るのを聞くときにもそれを理解している。それでは時間とは何であるか。誰も私に問わなければ私は知っている。しかし誰か問うものに説明しようとするとは私は知らないのである」(二一巻一四章) アウグスティヌスが主題とした「時間」をグローバル化などの別の言葉に置き換えれば、私達は、アウグスティヌスと類似した問題突きつけられていることがわかる。

対象が様々な様相を示すことは、慣用的にアスペクトの違いと説明され、またディスコースの違いなども表現される。本稿で焦点をあてる reflexivity(再帰性)は、本来はこうしたものとはやや異なり、社会的には次のことを意

味している。即ち、私達の現実感とは、投影的に私達が構成するが、それだけでなく、私達も投影的に構成された現実から拘束を受け、さらにその拘束を受けた状態で、また投影的に現実を再構成し、そうした螺旋的な関係が連続する。換言すれば、「分析・研究された現象は、現実の『生きられた現象』の中では常にずれてゆくしかない」ということがそこには含意されている。⁴⁾しかし、人々は一つの現実の中に暮らすのではなく、諸現実の中に暮らしていると捉えるならば、現実の切りかえによって対象は異なる相貌を呈するようになると論じることもしよう。例えば日常卑近な例を取りあげてみよう。近年、駅前などにスターバックスコーヒー店を随所に見かけるようになっていくが、殆ど利用したことがない人にとっては、昔ながらの喫茶店の一つに過ぎず、一方、毎朝エスプレッソを飲んでから仕事にかける人にとっては、仕事への態勢を整えるための場であり、気に入ったコーヒー豆を手に入れている人にとっては、コーヒー豆の販売店となる。そして『フリーエージェント社会の到来』で描かれているように、ミニ起業家にとっては会議室であり、レンタルオフィスとなる。⁵⁾それぞれの人のそれぞれの捉え方がある種の暗黙知として、それぞれの人の realities の一部を形成しているのである。そして自分が実際のポジションを替えたり、また想像上でポジションの変更を行うことで、例えばそのスターバックスコーヒー店は異なる相貌を現しはじめる。

本書の編者である山之内が総論で紙幅を割いて取りあげたベックは、現代社会を再帰的近代化(reflexive modernization)とも規定している。またそのベックと組んで『再帰的近代化』を上梓したのがギデンズであり、ギデンズはベックよりも以前から再帰性概念と取り組んでいた。そこで本稿ではベック、ギデンズの著作を手がかりとしながら再帰性 reflexivity について検討しつつ書評を進めることとする。⁶⁾

再帰性 reflexivity に つ づ

「再帰的近代化」という言葉は、次第に人口に膾炙しつつあるが、これまで reflexive については、幾つかの訳語があてられてきた。ベックの『危険社会』の邦訳では Reflexivität に対して、「自己内省的」という訳語があてられ、ギデンズのこれまでの諸著作に対する邦訳では、reflexive に対して、反省的、内省的という訳語がしばしばあてられてきた。そうした中で、近年 reflexive modernization を再帰的近代化と訳すことが定着しつつあり、そこから翻つて reflexive をいずれも再帰的と訳す傾向が増している。

但し、同じように reflexive modernization という言葉を用いているとしても、ベックとギデンズではそこに込められた意味は同一ではない。そのためベック、ギデンズのどちらを念頭におくかにより、同じ再帰的近代化という言葉を用いても、その内容には差異が生じがちである。^⑦ また同じベックを通じて受容されたとしても、後で触れるベックの再帰性概念自体の不透明さも手伝い、論者の間で解釈の違いが生み出している。例えば、社会学者の富永健一は、『社会変動の中の福祉国家』において、「近代産業社会が危険を生み出す可能性を高めたことを反省する必要がある高まった、という意味を表すものである」と論じており、さらに、再帰的と訳したのは、何が何に帰ってくるのか不明であるとして、再帰的と訳すことに異議を唱えた。^⑧ これに対してドイツ史家の高橋秀寿は、ドイツ語での再帰動詞などを例に挙げつつ、近代が自らを近代化するから再帰的近代化なのだと論じている。高橋によると「近代はその object を近代化し尽くし、今度はその近代化自身が生み出した共同体を近代化してゆく『再帰的近代化』の段階に入っ

ところで reflexive という概念は、OED を繙くと明らかのように、ここ数十年に成立した造語ではなく、反射すること、熟考することという意味合いで、古くから用いられていた。それが社会科学上の用語に転用されたのは、一九三四年に刊行された、J・H ミードの『精神、自我、社会』においてであった。この書の中でミードは、reflexive であること(reflexiveness)について、「個人の経験が自身に再帰する(turning back)することである reflexiveness によって、全ての社会過程はそれに関与する諸個人の経験の中に反映されるようになる」と論じ、「従って、reflexiveness は、社会過程において、精神が発達するためには不可欠の条件なのである」と結んでいる。¹⁰⁾そして大戦後、アメリカ社会学において、この reflexive という概念は、グールドナーの著作やエスノメソドロジの研究領域で鍵となる概念として用いられるようになった。社会学の再生を掲げた一九七〇年の著作でグールドナーは、reflexive sociology を目指すべき新たな社会学を表現する言葉として選んでいる。ここでグールドナーが、reflexive という言葉を選んだのは、認識主体と対象とを完全に分断して対象や自己についての知識が成立するのではなく、主体(個人)と対象(社会的経験)の間で相關的に知識が成立するという認識を強調するためであった。その限りでグールドナーが、ミードの用語を継承していることは明らかであろう。但し、グールドナーの活動は、七〇年前後の反ベトナム戦争に代表される混乱の中で、従来の社会科学に対する批判という文脈で解釈され、そのことも手伝い reflexive sociology は「反省的社会学」と翻訳され、その反省の中には、従来の社会科学のあり方に対する反省という意味が込められていると時に解釈されることになった。

一方エスノメソドロジの領域では、reflexivity は reality の構成に関わり、要諦となる概念としての位置を確立した。例えば、一九七五年に刊行された、メハンとウッドによる『エスノメソドロジにおける現実構成 The Reality of Ethnomethodology』では、書物の扉の裏に、手に持たれたペンがその手を描いてゆくというエッセイのデッサ

ンが掲載され、その絵は reflexivity を視覚化したものであると説明されている。エスノメソドロジーでは、投影的に reality が構成されると同時に、投影する主体も、その reality に影響を受けてゆくという構図が確立し、そうした reality の性質を reflexive と説明していた。こうした意味での reflexivity に反省性という訳語をあてることが決して適切とは考えられない。そのためエスノメソドロジーの領域では、reflexivity は、「相互反映性」「相互反射性」などと近年では訳されている。そして reflexivity について山田は次のように説明している。「当該の状況についてのメンバーの知識や記述が再び前にかえってきてその状況を組織する一構成要素として編入されるという事態がリフレクシヴィティである。」¹¹⁾

ベックは、伝統社会の近代化と産業社会（＝階級社会）の近代化を区別し、前者を「単純な近代化」、後者を自己内省的な近代化（再帰的近代化）と置く。そして、近代化された階級社会（産業社会）は、もはや階級社会でなく、リスク社会と捉えるべきものであり、そこでは家族、職業、企業、階級、賃労働、科学などの全てのものが変化することになると論じられる。ベックが再帰的という言葉を選んだのは、M・ディーンの指摘によれば、モダンとポストモダンとの不毛な議論を避ける意図からであった。¹²⁾ 但し、それだけならば他の用語をあてる余地もある。再帰的という用語がその中で選択されたのは、自然や伝統など固定的に存在した対象を近代化するのではなく、近代化したものを再び近代化し、その成果をまた近代化するという、いわば螺旋的な近代化プロセスの段階に現代が突入したという認識が根底にある。つまり、ベックの場合、社会学の伝統とやや離れたところで、再帰性という概念は用いられている。実際ベックは、ギデンズ、ラッシュとの再帰的近代化についての共著で、次のように述べている。「産業的近代化の自己変革、自己廃棄についての、記述的、経験的・理論的意味での「Reflexive」は、社会学に由来する Reflexion 概念とは区別しなければならない」。¹³⁾

ベックはフーコーの社会認識さえも古典社会学に囚われた見方であると批判し、新しい時代に対応できる新しい社会学を提唱している。そうした点からも、ベックが再帰性について、従来の社会学的知見に拘泥してはいないことは了解できる。但し、ウェバー、フーコーなどによる知見をものは不適切なものと退けるとしても、現代社会はアイロニーを濃厚に含むものとして告発対象となるという彼らの姿勢をベックは継承する。リスク社会は破局社会であるというベックの批判意識を考慮するのであれば、先の富永のように、再帰的という訳語はそうした批判意識を反映するものではないとして、「反省的」という訳語を選択する余地もあり得るだろう。一方、近代が近代を近代化するという高橋の先の議論は、歴史的区分に過ぎない近代を主体化している点で、一見、荒唐無稽にも感じられるが、近代を近代化するのが再帰的近代化であるとしたベックの説明を考慮すると、頷けないものではない。

一方ギデنزの場合、ベックと異なり、七〇年代後半から、マクロ社会学とミクロ社会学の融合を目的とする方法的な格闘の中で、グールドナーやエスノメソドロジーの成果である再帰性観念を発展的に受容しようとしていた。七〇年代後半にギデنزは、社会学の方法について、『社会学の新しい方法規準』（一九七六）、『社会理論の現代像』（一九七七）、『社会理論の最前線』（一九七九）を書きあらわしているが、そのいずれでも reflexive monitoring を社会学的探求の鍵になる観念として扱っている。

ギデنزによれば、我々の日常の行為は、暗黙知(tacit knowledge)に依拠しながら、連続したよどみないものとして存在する。そして、それを再帰的モニタリング(reflexive monitoring)することで、行動の理由、動機が生じる。¹⁹⁾さらにギデنزによれば、この概念は、ミクロとマクロの社会学を統合する手がかりとなるものであり、また個と全体のいずれかに偏することなく認識を構築する場合の鍵ともなるものであった。例えば市場という構造的存在は、それ自体として実体的に存在するのではなく、個々の人間が日常の経済行動を通じ、その市場という構造を追認するこ

とにより、日々更新されてゆくものである。¹⁵⁾ こうしてギデンズの再帰的モニタリングという観念は、エスノメソドロジーで用いられた概念をそのまま踏襲したものではないとしても、現象学的社会学からエスノメソドロジーにいたる過程で構築されてきたリアリティを巡る豊かな考察を継承しながら結ばれたものであった。八〇年代以降のギデンズにおいても reflexivity が、自省、内省など、社会的領域との関わりが希薄な個人的な行為と捉えられているわけではないことは、『近代化の帰結』（邦訳『近代とはいかなる時代か』）の次の部分からも明らかであろう。「社会学的な知識は、社会生活の領域に出たり入ったりしながら螺旋状に、自らとその社会生活の領域をその過程の不可欠の要素として構築する。これが reflexivity のモデルである。」¹⁶⁾ そしてこうした再帰性把握は、二〇〇二年の『暴走する世界』でのグローバル化解釈でも継承されている。

もちろん、エスノメソドロジーが論じる再帰性は、人間の一般的行動を対象とするのであり、近代においてのみ成り立つ性質のものではなく、ギデンズ自身もそれを認めている。しかしギデンズによれば、近代以前の再帰性が安定した伝統の存在に拘束されていたのに対して、近代ではその伝統が姿を消してしまい、再帰的に日々更新される日常は、定まった方向がなく、激しく流動し、人々は荒れ狂い暴走するジャガーノートに乗せられているような状況に陥る。再帰性を原因とする変化の度合いは、現代に至り著しく増大したのである。¹⁷⁾

こうしてギデンズは、ベックがミードからエスノメソドロジーに至る方法論的な流れと一線を画した形で再帰性を提示するのに対して、むしろその延長上に再帰性を捉えた。¹⁸⁾ もちろん、両者とも、再帰的近代である現代社会では従来の認識枠組みが通用しにくいこと、そしてこの社会が急速な変化を必然的に生み出すものであるという認識において共通する。しかし再帰性の捉え方の違い、そしてギデンズがベックほど濃厚には近代を告発する姿勢をとらないことは、幾つかの差異を生み出すことになる。両者のリスク解釈の差異もその一例とすることができよう。ギデンズ

による『暴走する世界』のリスク論は明らかにベックの議論を承けているが、ギデンズは、リスクの保険業と深く関わる語源を確認した上で、「外部リスク external risk」と「人工リスク manufactured risk」に区別し、外部リスクは、固定的な伝統や自然によりもたらされるリスクであり、人工リスクは、増大する知識が世界に与える影響によりもたらされるリスクであると措定している。ここでは、伝統が外部リスクに整理されている点からも、リスクについてギデンズが再帰性を軸に理解していることが窺える。ギデンズにとっては、リスクもまた激しく流動するものなのである。一方ベックは、再帰的近代では危険が様々に増大しているが、危険の認定すら科学の合理性に委ねられていると告発する。ここからはベックが、リスクを、科学的合理性では認識できない対象として厳然と存在しているものと捉えていることが窺える。その点で、ベックにとつてのリスクは、ギデンズに較べ、告発すべき対象として実体性を増している。¹⁹⁾ 結果として、ベックの場合、危険の存在自体に人間の再帰的な作用が関わっているという関心は前面から退く。そのため、例えば株価や通貨が暴落して経済危機が発生する、などのリスクは、ギデンズのリスク論の射程には入るが、ベックの議論の射程には入りにくい。

総力戦体制、政治

従来のグローバル化を巡る議論は、グローバル化の存在自体に対する懐疑、グローバル化への趨勢を認めた上で、積極的にそれを肯定するもの、強くそれを批判するもの、そのいずれともいえないもの、とおおよそ四つほどの流れに整理することができる。但し、どの立場に立つにしても、グローバル化は主として経済的現象に焦点をあてて捉えられるがちであった。そして、多くの場合、グローバル化と主権国家の形骸化との関係は、相互に排他的な関係にある

と理解された。例えば、大前研一は、九〇年代のはじめに、経済のグローバル化により主権国家の衰退が帰結すると論じ、近年の著作でもそうした捉え方を崩していない。あるいは、近年のグローバル化を巡る議論では、主権国家を一つの容器と捉え、グローバル化の進展により、その容器が透過性の高いものに変容したという理解が提示されている。

こうした国家退場論に対しては、すでにS・サッセンなどにより、グローバル化は国家の統合力を弱体化させるものではないという異論が提示されてきているが、本書の総力戦体制という規定も、国家退場論に対する異論の一角を形成する。その際、総力戦体制という捉え方は、「一九四〇年体制」という規定とも重なり合う。しかし両者は、国家の地位が低下しているという認識に異を唱える点で共通性があるとしても、基本的な視座を異にしている。²⁰一九四〇年体制論では、統制的金融システム、中央集権的税制、借地借家法など多くの点で、戦前の総動員法体制が戦後も持続し、結果として現状の日本では、適正な競争が阻害された中央統制が残存していると論じられる。つまり一九四〇年体制論では、近代を批判的に捉えようとする意図は全くない。むしろグローバル化の進展、国家の退場というプロセスを賛美すべきものと捉え、日本は、政治経済諸制度において、その道を歩む上で大きく立ち後れていると考えられている。それに対して、本書は、アイロニーを孕むものとして、近代を告発する姿勢を根底的に備えており、具体的に表面に現れる集権的統制を直接的な問題とはしない。美馬論文中の次の指摘は、そうした問題意識を簡潔に表現している。「ここで改めて強調しておかなければならないのは、国家の経済的な側面での調整能力が弱体化することは『国家の退場』ではないし、『小さな政府』を生み出すわけでもないということだ。」（本書一八九頁）つまり、本書での総力戦体制という規定は、ウェバーによる「鉄の檻」、生活世界の植民地化というかつてのハーバーマステーズ、或いはフーコー的な意味での身体的管理体制という問題意識を継承し、近代に対する批判的姿勢を堅持しながらも、

ベックが主張するように、これらが古典的社会学の基本前提に囚われた見方であるのか、それとも依然として有効な捉え方であるのかを検討してゆこうという意図に支えられている。

再帰的近代化について、ギデンズのスタンスとベック的なスタンスを弁別するならば、本書はベック的なスタンスを採る。そして現代社会に対しての告発を、ベック的な立場とフーコー的な立場に分けるなら、本書は、それを考究してゆくことが重要であるという立場に立つ。ある意味で、ギデンズのスタンスは、イギリスの経験主義、功利的、ノミナリスティックな発想という思想風土の出自をとどめ、現代社会の物質主義的傾向に比較的寛容である。或いは、認識論、価値論での相対主義は、足下をすり抜けてゆく日常生活での物質主義に無防備である。そのためにギデンズのスタンスは、現代社会の根源的病理を厳しく見つめる姿勢を欠いているという批判を甘受しなければならなくなる。それに対して、ベック、或いはフーコー的スタンスは、現代社会の孕むアイロニーを凝視する姿勢を崩さない。だが、それを告発することに性急なあまり、抑圧、被抑圧の境界線をあまりに強く引き、そこに友敵の原理を持ち込む傾向が認められるようにも思われる。そこでは再帰性を軸に相対的に現象に接する場合と違い、その境界線は不変のものと捉えられ、実体化する。そうした発想は、文明を実体化し、その衝突を不可避のものとする思想と共通するものを持っていると指摘することができるだろう。そしてその延長上には、「病者と生活保護受給者と犯罪者たちの新しい連合」(本書一九四頁)に希望を見いだすといった状況が待ち受けている。そこに至ると、民主主義的なものの姿はどこにも見いだせない。こうした別の陥穽を考慮するならば、ギデンズ的な、ある種の凡庸性も貴重なものに思えるはずである。

但し、いずれの視座に立つにしても、政治理解に対し、深刻な問題が投げかけられていることは疑いえない。いずれも、政治的領域に限定された形での従来の政治論を時代遅れのものとして批判する姿勢を明確に持つからである。

ベックは『リスク社会』のなかで、「残りの半分の決定権限は、公の統制を受けず、正当性の理由付けもされないまま企業や科学に属す」（邦訳三七八頁）、「今や社会を形成する潜在的可能性は政治システムから科学Ⅱ技術Ⅱ経済的近代化というサブ政治システムに移っている」（邦訳三八二頁）、「将来の社会が形成されるのは議会においてでもないし、政党によってでもなく、それがなされるのは実験室の中であり、取締役たちの会議室においてである」（邦訳四四〇頁）と論じ、政治についての観念を大胆に変更すべきことを主張する。そして新たな政治の創造が説かれ、そこでの民主主義の徹底が理想として掲げられる。またギデンズの再帰的近代化の論理からも従来の民主主義論とはやや異なるスタンスで民主主義の徹底が導かれている。ギデンズのように再帰性を理解する場合、個人の内面性や永遠性や自己実現など、ある絶対的な定点から政治的価値を導くことはできない。激しく流動化する再帰的近代化状況にあって、安定して普遍的価値判断を導くことができる定点など存在しないのである。そうした状況にあって許容できる決定は、多数の意識が決定に反映されることを必要条件として成り立つ。そしてそれがギデンズによる民主主義の徹底の主張につながっている。政治理論の伝統の中で言及されてきたような実体化された共同体を背景とする民主主義論をここに見いだすことは難しい。

こうしてベック、ギデンズなど、社会学的知見から生成した論理は、政治学的知見に対しての攻勢を強める。また一方で政治学的知見は、経済学的知見からの攻撃にも晒されている。民営化論、小さな政府論などは、政治的領域にあった決定プロセスの一部を、経済的領域に移管させようとする動きであり、結果として、政治学的知見が妥当する領域は縮小するだろう。更に合理的選択論などにより、政治的決定の論理自体、科学的合理性を纏う経済学的知見に浸食されつつある。政治学的知見は、何らかの独自性を保持する契機をどこに見いだせばよいのだろうか。社会学的知見、経済学的知見を統合する論理として、自らの存在意義、アイデンティティを確立することは可能なのだろうか。

その隘路は一層厳しさを増しているように思われる。

【注】

- (1) J.N. Figgis, *Political Thought From Gerson to Grocius*, Harper Torchbook, 1960, p.5.
- (2) 二〇〇三年一月一日開催、桐蔭横浜大学西洋法史研究所主催シンポジウム。ネル教授による報告は、「中世の教会における法発展の担い手——第一部グラティアーヌスまでの時代」と題され行われた。(本号に翻訳が掲載)
- (3) 山之内靖『日本の社会科学とウェーバー体験』一九九九年、筑摩書房、九六頁。
- (4) 川俣正『アートレス』フィルムアート社、二〇〇一年、九四頁。
- (5) ダニエル・ピンク『フリーエージェント社会の到来』ダイヤモンド社、二〇〇二年、一九一頁。
- (6) 本文でも触れたように reflexive, reflexivity の訳語は様々であるが、主として「再帰的」「再帰性」という訳語をあてることとする。
- (7) 「ベックはギデンスおよびラッシュと組んで「自己再帰性」概念を用いた現代社会分析を提唱したのであったが、他の二人はともかく、ベックに関するかぎり、この提起が社会科学の根本的な組み替えを要請するものであったことは注目に値する。」(本書五七頁)、「論者によってその意味合いは異なる」(高橋秀寿「再帰的近代化」、『グローバル化を読み解く88のキーワード』平凡社、二〇〇三年所収)一三五頁。
- (8) 富永健一『社会変動の中の福祉国家』中公新書、二〇〇一年、一〇—一一頁。
- (9) 高橋前掲論文、一三五頁。
- (10) George H. Mead, *Mind Self & Society*, The University of Chicago Press, 1934, p.134.
- (11) 山田富秋『日常性批判』せりか書房、二〇〇〇年、六八頁。
- (12) Mitchell Dean, *Governementality*, SAGE publications, 1999, p.177.
- (13) Ulrich Beck, *Reflexive Modernisierung Eine Kontroverse*, Suhrkamp, 1996, s.43.
- (14) ギデンスのいう reflexive monitoring は「行為の自省的評価」と当初は翻訳されてきたが、最近では「再帰的モニタ

リング」と訳されるようになっていく。一九八九年に翻訳出版された『社会理論の最前線』では、「行為の自省的評価」と訳され、一九八六年に翻訳出版された『社会理論の現代像』では、reflexivity は、「反省性」と訳されている。

(15) 思想史上の主題を例にとると、主権などの観念も再帰性を軸に説明することができる。主権概念が創造され、しばしば用いられるようになると、主権というものが実在するという感覚が生じる。そうした感覚に基づいて行動することで、主権の実在性が日々更新されるのである。

(16) Giddens, *The Consequences of Modernity*, Stanford, 1990, pp.15-16.

(17) 現代の世界は、ジャガーノートに乗っているから、runaway world なのである。『暴走する世界』は、グローバル化についての平易で体系的な書物と理解されるが、根底にギデنزの再帰性の観念が存在することを掴まなければ、その真意を理解することはできない。

(18) 結果として、ベックとギデنزの間には、realities の構成についての捉え方も異なってくる。もちろんギデنزの再帰性の起点でもあるエスノメソドロジーにおいても現実(reality)がどのように構成されるかは一様ではない。暗黙知と言語ゲームという二元性(ガーフィンケル)、ドンファンの世界と西欧世界の対象性(カスターナダ)などがある一方で、諸現実が相互に透過性をもって存在しているという理解もある。ギデنزは、日常の人間の行動は連続的で意識化されないものであり、そうした連続的な行動に対して再帰的モニタリングがなされると捉えていた。つまり連続的で意識化されない身体性と深く関わる世界と流動的で再帰的モニタリングにより形成される世界という二元論的な把握がなされている。それに対してベックの場合は、近代が reflexivity を軸にして流動的となるという視座はとられていない。

(19) ベックはリスクを存在論的に扱いたがっている、とディーンも指摘する。(Dean, op.cit., p.182)

(20) 野口悠紀雄『一九四〇年体制』一九九五年、東洋経済新報社。